

服薬中断リスクの高い高齢者への A タイプの薬局 DOTS を 実施している事例について

新宿区保健所予防課

山田万里・斉藤礼子・佐藤和央・高尾良子・小嶋由紀・高藤光子・長嶺路子・深澤啓治

新宿は、歌舞伎町、高層ビル街、新宿御苑と様々な顔を持っている区で人口約 31 万人。高齢化率は平成 19 年で 20.3%（外国人を含めると 18. 2%）、全国平均をやや下回っています。それに対し結核罹患率は人口 10 万対 42. 5 と全国平均の 2 倍以上です。

薬局 DOTS の実績 (平成15年1月～平成20年2月末)

実施総数		62人
経過	継続	6人
	実施中に再入院	2人
	終了	52人
	再入院にて終了	2人
	中断	0人

70歳以上29人 個別要注意者33人

協力調剤薬局: 47店舗

今回紹介する薬局 DOTS を、新宿区では平成 15 年 1 月より開始しました。これまでに、62 名に実施していますが、全員が中断せず治療を終了できています。この薬局 DOTS の対象は、70 歳以上の人、もしくは、不規則勤務、昼夜逆転などで治療中断の可能性が高いとされた人で、本人に説明し了承の得られた方です。

症例の概要（１）

- 77歳
- 女性
- 夫と二人暮らし
- 結核：平成19年6月16日登録
- ガフキー8号(喀痰) bⅡ3
- 薬剤感受性すべてあり
- 既往：リウマチ性多発筋痛症・橋本病・胃潰瘍・腰椎圧迫骨折・白内障

今回紹介する症例は、調剤薬局で毎日、薬剤師による直接服薬確認をしている方です。77歳の女性で、82歳の夫と二人暮らし、肺結核で入院直後のガフキーが、喀痰で8号、病型はbⅡ3、薬剤感受性はすべてありました。またリウマチ性多発筋痛症のため、膠原病科にも通院しています。

症例の概要（２）

- 平成19年6月16日から9月16日まで結核病棟に93日間入院
- 肝機能障害により抗結核薬を減感作
- 9月3日より
INH×2T
RFP×3C
EB×3T

93日間、結核病棟に入院しました。治療開始後まもなく肝機能障害が出現したため、休薬、減感作を経て、退院の約2週間前より、イソニアジド2錠、リファンピシン3カプセル、エタンブトール3錠の定量になりました。このほかに、アスパラK、プレドニン10mg、タケプロンが処方されていました。

薬局DOTSを導入した理由

- 高齢世帯
- 認知症（HDS-R17点）
3ヶ月にわたる入院にもかかわらず、
院内DOTSのルールが覚えられなかった
- 副作用への対応
- 本人、家族の了解

薬局DOTSを導入した理由としては、4つが挙げられます。ひとつは高齢世帯であること、また一つは認知症が疑われたことで、その根拠としては長谷川式で17点であったこと、また、この病院では院内DOTSをしていたのですが、3ヶ月にわたる入院の中でも院内DOTSのルールが覚えられなかったこと、三つ目として、薬が定量になって2週間で退院になったことから、副作用が出たときに第三者に確認してもらえるようにしたかったこと、そして本人と家族から了解が得られたことです。

経過

- 原則毎日、調剤薬局薬剤師による直接服薬確認
平成19年9月26日開始
平成20年3月14日現在171日
- 薬剤師の訪問：5日
- 空袋確認：14日
- 自己申告：1日
- 服薬せず：4日

経過ですが、平成19年9月26日開始し、平成20年3月14日(昨日までの)171日のうち薬剤師が自宅まで薬を届ける：5回 家族がかわりに薬を取りに行き、翌日以降に空袋確認：14回 空袋をなくしてしまい服薬したことを自己申告：1回 服薬せず：4回で、これ以外の147日は薬局に出かけていき、薬剤師による直接服薬確認をしています。

継続できている要因

- 薬局が自宅から近い(徒歩1分)
- 薬局に行くことが習慣づいた(本人談)
- 薬局が元日以外は開店している
- 家族(夫、娘)の協力
- 病院との連携
分三、分二の薬を1，2回で服用

継続できている理由としては次の五つが考えられます。

- 薬局が自宅から近いこと
- ご本人もそう話しているのですが、薬局に行くことが習慣づいたこと
- 薬局が元日以外は開店していること
- 声かけなどの家族(夫、娘)の協力
- 病院との連携

薬の一包化はもちろん、これは抗結核薬の話ではないのですが、分三だったアスパラ K を分2に、分二だったプレドニンを1回で服用できるよう処方を変えるという柔軟な対応。



実際はこのようにして、薬剤師から薬と水を受け取り、服薬しています。薬局では本人のために、いすも用意してくれています。



服薬が終わると書類に本人がサインをします。

効果

本人にとって

- 確実な服薬(抗結核薬以外も)
- ひきこもり予防、介護予防
- 適度な刺激
(服装、ヘアースタイルに気遣うようになるなど)

連携において

- 変化へのスムーズな対応が可能

毎日の薬局 DOTS による効果としては、ご本人にとっては、確実に服薬できること、ひきこもり予防そしてそれが介護予防につながること、服装やヘアースタイルに気を遣うようになるという適度な刺激になることが期待できます。連携という点においては、ご本人の状態に変化があったとき、薬局と保健所で把握している情報を病院に速やかに伝えることで、スムーズな対応が可能になります。

今後

- 中断リスクの高い高齢者が増加
- 患者にあった服薬支援方法の模索
- 病院・保健所・地域資源・本人・家族の連携

今後に向けてですが、高齢社会の中で、服薬中断リスクの高い高齢者が減るということはありません。薬局 DOTS は病院と薬局の多い新宿だからできるというわけでもありません。患者本人にあった支援方法の模索の中で出てきた方法であり、関係機関の理解と連携の中で成り立っているものです。今後も病院をはじめとする関係機関との連携をとりながら、保健所としてできる支援をやっていきたいと考えています。ご清聴ありがとうございました。

紹介：

本報告は、第 153 回日本結核病学会関東支部会（平成 20 年 3 月 15 日、東京）で報告されたものです。薬局 DOTS が広がり A タイプの DOTS を薬局で行っている地域もありますが、まだ多くは週何回かの直接服薬確認と未来店の日の空包確認で実施されています。本事例は、薬局での毎日 DOT（直接服薬確認治療）であることに加え、高齢認知症患者への服薬支援のあり方を QOL 向上の立場からもとらえている良い事例です。今後、結核治療の維持期に間欠療法が導入されれば毎回の DOT は必須事項（1 回でも飲み忘れると治療失敗につながる）です。また、これから高齢認知患者の治療支援の問題は、都市部の保健所でもますます大きくなっていくことでしょう。その点で、本報告を、ご紹介いたします。

結核研究所 大森正子